

寛永諸家譜

藤原氏士四冊之内三
為憲流

112

内閣文庫	
番號	和 20199
冊數	186 (112)
函號	特 76 1





相良

船越

石首

入江

奥津

原

寛永詔家系図傳

藤原氏

之三 南家

為憲流

相良

淺草文庫

時文

家傳よりいへば時文は天保十二年

時理が中なり

維兼いけん

従子位下

相良の元祖げんそ

維頼いらい

従子位下

同頼どうらい

元頼げんらい

工友大友くゆうたゆう

頼寛らいかん

友友ゆうゆう

頼繁らいはん

大膳大友たいぜんたゆう

頼系らいけい

四郎 法名蓮寂まんだん

建久甲子 後鳥羽院ごとびろ 此沙字こさに肥後ひご

玉球磨郡たまぐり 多良木たらぎ 下向げこう

長頼

三郎

建久九年肥後玉球磨郡人衣衣

下向

正治元年正月十日頼朝薨逝

三郎法師蓮佛と

号

元久二年坂東二溪川合戦の時

長頼分指高名一而一麻と

姉のそのとさ若と家こころ此

甲冑今一りいさそあひつ了

そのら留山彦目二郎重忠と

伐れとま教軍れ先光となつて

歌陣一りいさそみいん

味方此軍兵糧の袖といふ

てさむじとくごも長頼といふ

水と浦とを流ぬり糧の行

神と引きつゝく歌陣ふもせり
志げお戦歌の首とうばひあり
大塚れ中ちわけしげれふ
うひくその鐘とせよ傳へ
相良が袖切とふ
兼久三の宇治川合戦れも歌
大塚と川底しゝらと相訪とふ
とととね丸竟れぬふふ
大塚と切しゝらんく川を

しゝら高名とそよとき帯とふふと
うられふ力と宇治川の鐘切とふ
し今しゝらと相訪とふ
れ熱切しゝらとてを別回
乃が播磨と飾磨郡あり
其あふ系利恒庄と毛下毛と
加倍と

建長六年三月十日死と歳七十八

頼親

四郎兵衛尉

美納しはふ

頼親道念よりありしとき美納

美納八幡社系のとき先祖のとき

美より武門に面目人のうや

むとこ誂り美納豊遊より

ては神一観心と号とのち

福師此勅宣とかめ観心福師

と号と

頼俊

九郎 法名迎道

正徳中異賊と討感書あり

そのとげりい

異賊合戦勅切事迄可法

斗心依治執達事

正應五年十二月一日

佐奥守左判

相良九郎入道殿

相摸守左判

長氏

六郎三郎 法名道隆

元弘五年中令旨等御承その詞

了

为胡歌進討所被召軍兵也

被合戦山忠兵可下之恩賞之中

依給紙達し件

元弘三年六月十六日

大祚 左判

相良六郎三郎入道殿

頼廣

源三郎

法名蓮花

定頼

兵庫先

後光厳院の御宇延文二年十月十八日
編旨と抄一筆兵庫先小使と
法名勢河

前頼

近江守

法名立河

親王交れ令旨ありその詞より
肥前守護職為日向因幡可令
知行也

元中二年二月十七日

大患依 立判

本領新恩地亦安堵事 先後被
治早管領不々々相違者
天皇めし恙之状

元中二年十月十日

大患辨 立判

相良近江守殿

實長

兵庫允

義海將軍 兵庫允 二 日 々 々

法名 実阿

前續

近江守

義海將軍 近江守 二 日 々 々

法名 竺芳 永 徳

亮頼

三郎

法名 悦山 大 教

長續

友五郎

義教將軍 友五郎 監 二 日 々 々

法名 牛原院 大 頼 二

應仁二連二月廿五日記
法名室
道珠

為續

法名西峯道船
法名村
義尚將軍より法名村小住せらるる
いゝわがれなりと物けり
いゝく宗祇法師が吹噓と
て為續が詠言と新巻久岐集

此中より入

そのうち八代芦刈りびり七代と
せりらるるその地と傾ト是天草
郡と成り

長每

右鳥

義中將軍より近江守小住せらるる
法名大地道心

長祇

右郎

法名大善道世

長定

氏初大輔

実吉為孫が兄相摸守頼令が嫡子

なり

亨祿口述の記と法名お池道秀

義滋

近江守

美吉女祇が兄なり

天文十四年十一月二十七日官務

勅とうけし御り肥後公卜向

同日十二月二日堤五郎卜一叙せし

文心少輔一叙せし法名不述永幸

晴廣

坂下邸

従下

石巻清江

法名北山蓮花

薩州清津氏と不和なる事

て数代兵丑と傳ゆと云ふ事

毎度清事と改む又肥後国阿蘇

家と数度桃城とも清利と傳ふ事

と云ふ事

義陽

俊理大夫

従下

初八四郎右衛門

杉房と号す

義輝將軍上野紀伊守源輝秀

と号す之は清江の事也

下一をよむ永祿七年五月

俊理大夫より紀伊と義の字と

と云ふ事ありて杉房を

あゝ先義湯と号し
正三年十二月二日肥後
彌音原と号し我死に
法名越江道芳

忠房

四郎太郎

正三年二月十日細作
死にぬとて長母とて

家督と号し
法名云膺子信

長母

左兵衛佐

文禄元年朝鮮陣のとき長母
十八歳に海軍一の地
左陣と号しとて七歳
安宅城を漢南に境ありあり
朝鮮要害乃地なりか故に

清正あひまゝるる各毎をくけ
地と海をくくむこれより各毎
地兵とわづらて左番ととさ
る朝鮮の大嶽のわづら嶽
をくくくくくく敷地を爲れ
軍於てくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくく
乃軍兵安島城と圍とくくく
各毎くくくくくくくくくく
各毎くくくくくくくくくく

冬より春より及とせや
各毎をくくくくくくくく
乃地なるくくくくくくく
これと守りくくくくくく
戰場よりくくくくくくく
各毎清正が善信とまゝくく
くくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくく

乃城を都に奥よりありとて
小治正継中乃もれり一語てい
我者毎をく安色城と浦り
一に長毎のむす討死に
不我波が死生と云く
都より赴事ふられ西目阿ん
やとく治正すれり安色城
一に長毎のむす討死に
不我波が死生と云く
都より赴事ふられ西目阿ん
やとく治正すれり安色城

奥よりありとて
勇士ありとて
此奥よりありとて
ありとて
目これとて
一に長毎のむす討死に
不我波が死生と云く
都より赴事ふられ西目阿ん
やとく治正すれり安色城

全羅の晋州の城とせしむる
長毎戦場よりありとて
一に長毎のむす討死に
不我波が死生と云く
都より赴事ふられ西目阿ん
やとく治正すれり安色城

此毎が家長球磨れ七卒といき
ひく津波の城よりとせ
まの津波門が津卒四十余人と討
捕これとこころ津波よりと
子味方此軍兵まの津波門が首と
しそるこれよりとひく毎が七
卒祇とかり婦と戦死とれ色の
二十余人なり四十余れ首とらふ
りら肥列名護屋よりとくつと

秀吉より敵と

慶長五年此毎上京とこれとこ
東照大権現上松原猪と津波成れ
そめ奥列より教向より津波毎
も又名たるよりとくつとす家
とくつとあふ小川別津和よりとひく
石田治部少輔三成関東泰勲のそと
禁より家よりとひくそのそと海
よりとくつとあふよりとくつとこれ

関東れりぞと毎りしげくものち
と毎三成が備從りしるまでやじ
事とゆいぞして流別大垣の地
とししむ時り三成進言口乾聖
垣見和泉守本村也な藩父子と
ては城とちししそのち

大権現波年りなひくは合戦あり
べきし初中及りしるまで
新助義田平助とゆいて
と改り

しげくいさきり謀とあり
と家ごとく名号と相討りこれ
ときりありしり
とちやに大垣北城とゆい
大権現北魔下りしるまで
とゆいしとひくと改改書と
とゆいしとひく

大権現はと好と通りしるまで
とゆいしとひく日久しとゆいしとひく

ぬえんげべーあうりーとひさ
秋月高橋がりも毎のぞし
とふれししくらーく清恩
賞あ家厚ー秋月高橋長毎
日ありーて志と心戸小
通ど家少人なりあくーとひさ
能谷日茂野垣見和家木村也
日息男傳茂と村播とらひ級の
首とりいて水野日向守が陣小

とくふしきりー並政

大権現りー言とーそまひるこ
ろりーはかびー毎が軍口と感
考ふ

同八年三月從五位下叙せらる
大坂御陣のとき

大権現りー城守と
元和子連日向高権柴山輝起して
あうそひ祈ーこまに河部守重

正之公久保内膳正尉忠成治使
一て下向と女毎とあり正之
忠成とありけりる蜂起の族と誅
とこれよりと山中と見
まじりまらぬ

寛永十三年六月十日
卒と歳六十三 法名天叟玄高
慶長七年乙未母他人とありて
江戸よりまじりるこれ西王院人の

めあり寛永六年七月十日江戸小
坂のくみと歳八十 法名不心

頼寛

そ波守

十七歳少く藩府よりあり

大権現より相傳へりてあり

のらに戸よりまじり

台徳院殿小相傳へりてあり

えわ六^{ろく}年八月はつげつ從^よみ位下した小殿せうでんせられ
 去^さ波守なみもりよりほど
 父^{ちち}が喪むらいまごととりさうふ 鈞命きんめい
 とうりあらせては毎ごとくは家督けとくとはしまり
 球磨郡たまぐさぐさぐんと領りやうと
 母ははをあきまりしては女むすめたるこころよりり
 誰人たれひとともとしらずりありとて寛永
 十一^{じゅういち}年正月十日しんげつじつになりと

禊まぎ在あり

主殿助おもとのすけ

二十三^{じゅうさん}年としよりく

名迹院殿なせいでんより招福しやうふく
 いりふりあり

家紋





船越

家傳了、いよく三友為憲が後
亂入に右る先紙法何れハ後列
舟紙了、舟一入に浪川舟越
を紙とその子孫浪川中勢
大物並定衣香次昂舟紙
三島維貞為三人船船了
了、維貞右東門尉と号と正治

二幸正しり頼家後河此玉子
かのく頼家父子と誅する時
舟取浪川を香が一族頼家父
子等と討ちその賞うて取
れ地と領と舟取三郎浪川の
玉子と河川に居ると多那屋
文城とまじりくうぶゆ小湊文の
舟越也号に

● 定氏

多那屋 生玉浪河

多那屋湊文より領と

あるとき領口古津河より大蛇也

定氏矢とけちちてふれと時と

と

定渡

石巻の附 生玉河にお

系倫

孫次郎 生國曰あ

三好修理大夫より属す

系直

尾形尉 後を尾形尉にあしむ

生國曰あ

三好修理大夫も慶が才淡列れ

守護安宅持津守冬康より属す
 好冬康が甥三好也治より属す
 三好也治中より三好俊秀が小つ
 引大由とならて属す
 日十八日小田原陣の時三好俊秀
 下りて三好俊秀のれり
 文禄元年三好俊秀陣此刻小田
 原津守が海よりつりて
 三好俊秀の

形地とあり、ゆめ播磨河内丹波乃
うら敷ヶ原よりなるひく食邑と
くまをいふ

旧曰く豊后秀次自家の時系を
むとむ秀次よりりりりりりり
とむりりりりりりりりりりりり
好

東照大権現よりれく本領と給り
● 爰にありて國原陣のこき伝承し

く軍田あり、これ松入りりりり
宇智郡よりなるひく子五百石
乃形地とくまをいふりりりりりり
りりりりりりりりりりりりりり
旧十六日三月十七日七十二歳より
死す

永京

三郎田郎 奥列南部より生れ

永京八歳のとき、後府よりきて

大権現小掛湯こかけゆ一いっそそままひひ家か

そのらひらひくくりりいいささ

台徳院殿

將軍家しんげんけよりつゝつええそそままひひ家か

家紋いへもんたた也や

石谷

家傳よりいへばは二階堂と
号と大藏冠十一代を以て為憲
此後亂なりと政法を列石谷村
より伯耆村の西角より大岩石
河原を岩頭より八幡の庵あ
り是村の氏神なりと政法氏
神此傳よりいへばを以て

木の心より二階堂とありて
石谷と稱す

行秋

二階堂同播守 法名行秋

行書

右る元

を列ぬに店れ何人ぬに民部補

二男民部補と行秋が妹婿と
そのいふと行書とありて死す
行秋行書とありて死す
家督とありて死す
文明十年に六十七歳とありて死す
法名系吊

行書

ぬに民部補とありて死す

二階堂とありて、あはれに稱し
祖父氏部が補う稱号とりし
行法が才法捷とありて二階堂と稱し
永正九年九月十三日六十九歳に
死す 法名三休

法書

二階堂なる助 如江左石谷村小生
祖父行法法書と書育しその

ひとむかしうなむびく元服せ
しむかしこむかひとゆはるありて
二階堂とありて稱号とあり
其文二通あり九月六十一歳に死す
法名三休

政書

石谷十郎重頼 生没日あ
元龜二年二月十日政書ありて小

嫡男政信二男清定一曰よきれて
東照大権現了了了了了了了了
天正二年甲子四月七十一歳
死に 法名竜月即隆

政信

十哲馬村 生誕日未
元龜二年三月十日父政信より
了了政信二男清定父子三人女一

是

大権現了了了了了了了了

慶長十年二月未

台酒院殿了了了了了了了了

元和子年六月五日五歳に

死に 法名良完

清定

子郎太夫 生誕日未

元龜二年三月十日父政信より

しりせられ

大権現よりつてくまのり

寛政六年正月二日申午酉歳

死と 清名乃母

清正

友之助 生玉日あ

慶長七歳せられ

大権現よりつてくまのり

元和二年

台徳院殿

將軍家よりつてくまのり

貞信

十歳 武列多東和泉村小生

寛政十歳せられ

台徳院殿よりつてくまのり

將軍家よりつてくまのり

清元

七之助

尾別那古屋

寛永十三年八月十五日

將軍家よりつとくまひりしに

小姓組に番と許す

政勝

市島村

生金日あ

慶長六年九月

台徳院殿より賜しし御札

此小姓組の番と許す

寛永十一年十月より大田番と許

す

寛永十八年三月此裏門に番取

たり

將軍家よりつとくまひりしに

召し給ふ

成務

兵部 武列 守 生

寛永七 逢 六月

將軍家 一 福

日十日 逢 正 一 逢 大 逢 蕃 逢 逢

家紋 九 曜

● 春倫 ●

入江

大橋

春倫の軍より
橋別言規の城と
治り代く居候と

ける中録

● 春澄

助重 生國掎別

秀吉あり秀彰よりいふ事
元和元年逢五月廿六日坂北城より
之討死六十五歳

春重

源範 生國日有

秀彰よりいふ事坂北城に居元和

元年五月廿七日

東照大権現よりいふ事

台徳院殿よりいふ事

寛永三逢四月廿日死に年八十

法名宗心

春正

源範 生國日有

台徳院殿

乃軍家小つてくまのる

家紋

三輪さんりんに上の二れ輪の口くち籠かご

時信ときのぶ

後河守ごがわのり

維永いなが

従五位下したがひご

● 為憲むねのり

左近守さきねのり

時理ときり

貞津さかづ

維清 いせい

右子允 みぎこ げん

清房 せいぼう

四郎大夫

維道 いどう

奥津之稱と

十間坊絶と

来 きた

日記 にっぴ

生國巻目

東照大権現 とうしょう たいこんげん

治 ち

台徳院殿 佛証生 たいとくいん だん ぶつしやうせい

~~~~~

享和二年四月廿五日七十歳ありて

死と 法名常道 しと ぽうみょう じやうだう

忠能 ちゆのぶ

日記

生國日記

台德院殿下 此之 〰〰〰〰

元<sup>元</sup>和九<sup>年</sup>九月十九日 五十二歳

丁<sup>子</sup>死<sup>す</sup> 法名常照<sup>じょうしやう</sup>

忠行<sup>ちゆうぎやう</sup>

日記 生<sup>なま</sup>武<sup>ぶ</sup>院<sup>いん</sup>

台德院殿

將軍家下 〰〰〰〰

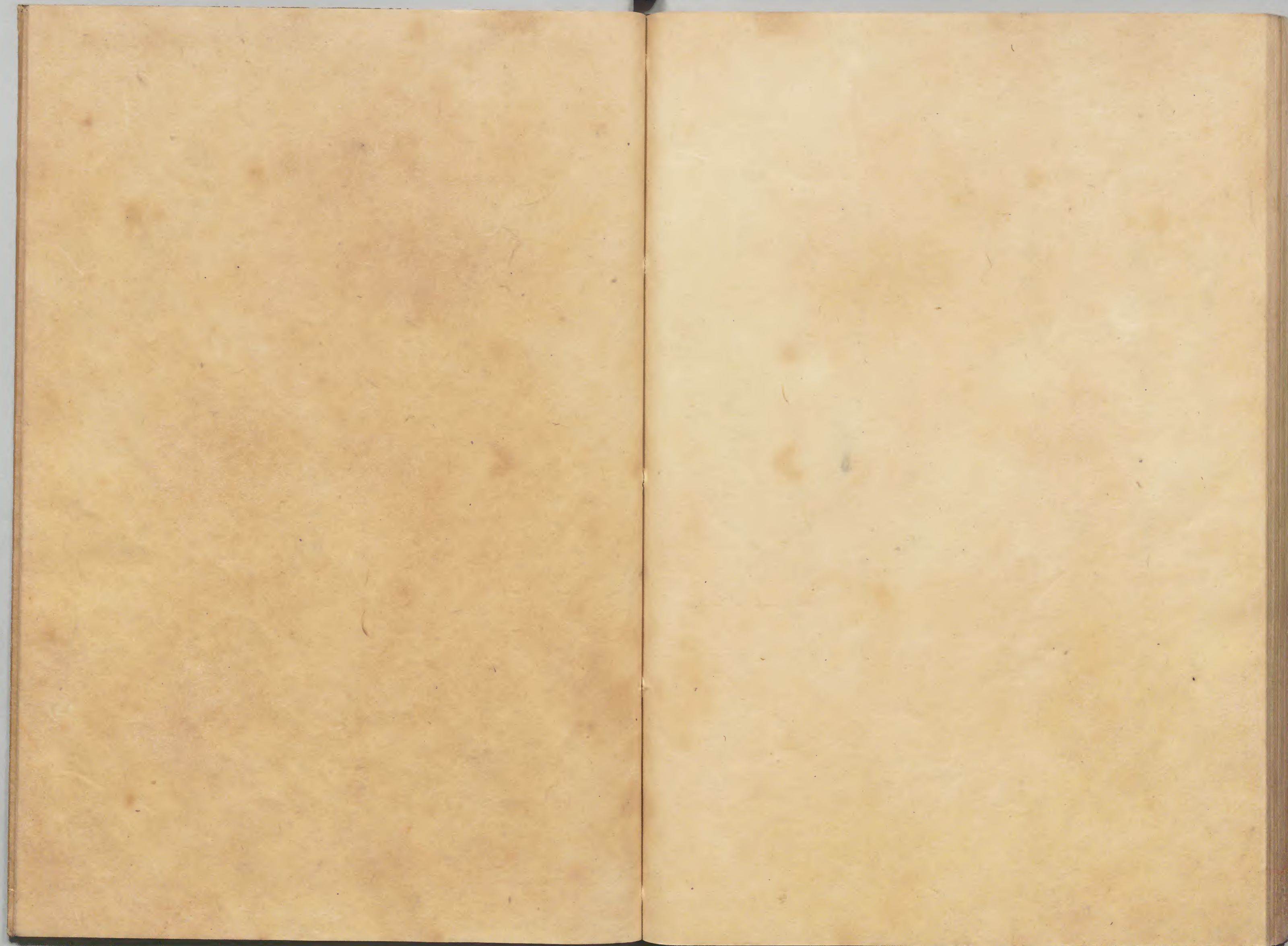
千二百名 余<sup>あま</sup>此<sup>こゝ</sup>死<sup>し</sup> 〰〰〰〰

宗能<sup>そうのう</sup>

兵衛 生<sup>なま</sup>國<sup>くに</sup>日<sup>ひ</sup>家<sup>け</sup>

將軍家下 〰〰〰〰

家紋 厨<sup>くしやう</sup>菱<sup>あし</sup>



原

● 某

三葉

生國三河

重久

龜茲

生國信濃

東照大権現  
了々々々々々

重國 しげくに

勅書 しき

生國 なまくに  
護河 ごが

家紋

本丸 ほんまる



